

令和5年度第3回企画展

土器

一万年でみる

宮代の縄文

宮代町郷土資料館

ごあいさつ

今から約 16,000 年前にはじまったとされる縄文時代は、弥生時代をむかえるまで 10,000 年以上続いた時代です。長い時のなかで、人々は変化する環境にあわせた生活をしていました。こうした縄文時代の様相は、遺跡から発見される土器や土偶、耳飾りなどの装飾品、石器などの様々な品（遺物）から垣間見ることができます。特に土器は時期の指標として用いられるほどに、形や文様の変化が多岐にわたり、縄文時代を知る上では欠かせない遺物です。

宮代町では現在、37 の遺跡が確認されており、その中で縄文時代の遺跡は 35 を数えます。遺跡からは様々な遺物が発掘されてきました。土器も例外でなく、縄文時代のはじまりのものから終わりのものまで、多種多様なものが発見されています。こうした土器からは宮代の地でも一万年にわたる縄文人の生活が営まれていたことがうかがえます。

今回の企画展では宮代町の遺跡で発掘された縄文土器を紹介します。縄文土器は出現以後、文様や形、色といった様々な要素で変化を遂げました。その中でも文様に注目し、製作道具とともに紹介します。町指定文化財である「^{びりゅうきせんもん}微隆起線文土器^{どき}」を含めた、多種多様な土器を通して、10,000 年の歴史をご覧ください。できれば幸いです。

最後に、企画展の開催にあたり、ご指導、ご鞭撻いただきました関係者の方々、発掘調査及び整理作業にご協力頂いた方々に深く感謝いたします。

宮代町郷土資料館

～凡例～

1. 本書は令和 6 年 3 月 9 日（土）から 7 月 7 日（日）まで開催される、宮代町郷土資料館 令和 5 年度第 3 回 企画展「土器でみる一万年 宮代と縄文」の展示図録です。
2. 期間中の休館日は以下の通りです。
3 月 11、18、21、25 日
4 月 1、8、15、22、30 日
5 月 7、8、13、20、27 日
6 月 3、10、17、24 日
7 月 1 日
3. 展示の企画及びポスター、図録の執筆・デザイン・編集等は当館学芸員 長瀬英俊がおこない、展示は資料館職員が協力しておこないました。
4. 写真や図版は縮尺不同です。
5. 会場及び本書中の敬称は省略させていただきました。

第1章 縄文時代のはじまり

縄文時代

縄文時代は土器の使用と共に始まったとされています。日本で発見されている最古の土器は青森県大平山元 I 遺跡^{おおだいやまもと}で発掘された無文土器で、科学分析によって約 16,000 年以上前の土器であると明らかにされています。

縄文時代と一括りにいっても、その様相は時代とともに大きく変化しました。縄文時代は大きく、草創期^{そうそうき}・早期^{そうき}・前期^{ぜんき}・中期^{ちゅうき}・後期^{こうき}・晩期^{ばんき}に分けられます。草創期はまだ寒い時代^{かんれいき}（寒冷期）でしたが、早期のころに温暖化を迎えます。豊富な陸・海産物を得た人々は定住をはじめると生活スタイルを変化させました。土器が多様化し、発展した早期以降がいわゆる縄文的文化であるとする研究も見られます。前期になると、より温暖化が進み、中期になるころには人口や集落の規模は最盛期をむかえたと考えられています。後期になると気温が下がり始めたことなど様々な要因で集落の分散や人口の停滞がおこったと考えられ、晩期の終わりになると稲作文化の流入とともに弥生時代が始まり、長い縄文時代は終わりを迎えました。

タイムスケールとしての土器

土器には様々な特徴があり、これまでの研究の成果から、その文様と形によって地域や年代が特定でき、土器型式^{ど きけいしき}と呼ばれています。現在では科学的な分析も進み、発掘される土器などに付着する炭化物や植物などから詳細な年代がわかるようになりました。しかし、現在でも発掘現場などでの年代決定は土器によって行われており、まさに縄文時代のタイムスケールとして用いられています。

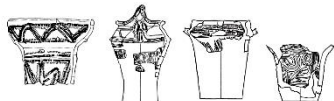
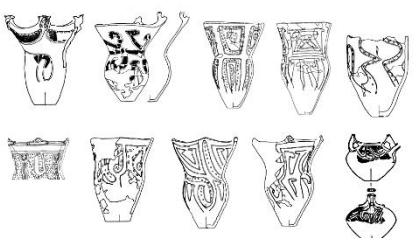
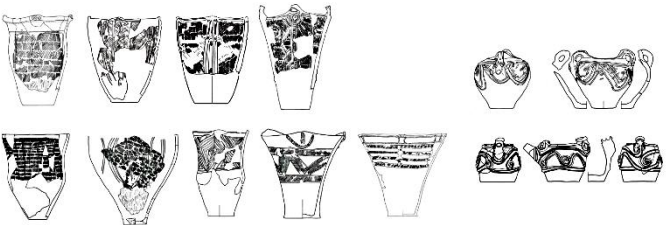
最古の土器

日本の最古の土器は 16,000 年前のものですが、宮代町の最古の縄文土器は前原遺跡から出土したもので、約 15,000 年前の土器です。「隆起線文系土器」^{りゅうきせんもんけい ど き}と呼ばれるグループに属しており、その中でも「微隆起線文土器」^{びりゅうきせんもん ど き}と呼ばれる土器になります。この土器は粘土紐を横方向に貼り付けることが特徴で、この文様のことを「隆起線文」^{りゅうきせんもん}といい、この中でより細いものが微隆起線文と分類されています。この隆起線を用いて土器によっては、波状の文様や格子目が描かれます。



前原遺跡出土 微隆起線文土器

町内出土の土器（一部）による縄文時代年表（縮尺不同）

草創期 11,500 年前	びりゅうきせんもん ど き 微隆起線文土器		
	よりいともんけい ど き 撚糸文系土器		
早期 7,000 年前	じょうこんもんけい ど き 条痕文系土器		
	うじょうじょうもんけい ど き 羽状縄文系土器	 花積下層式土器	 関山式土器
	もろいそしき ど き 諸磯式土器		 浮島式土器
	じゅうさんぼだいしき ど き 十三菩提式土器		
中期 5,500 年前	ごりょうがだいしき ど き 五領ヶ台式土器		
	あたまだい かつさかしき ど き 阿玉台・勝坂式土器		
	かそりいーしき ど き 加曽利 E 式土器		 曾利系土器
	しょうみょうじしき ど き 称名寺式土器		
後期 3,100 年前	ほりのうちしき ど き 堀之内式土器		
	かそりびーしき ど き 加曽利 B 式土器		
	ばんきあんぎょうしき ど き 晩期安行式土器		

早期の土器

今から約 11,500 年前、寒い時代（寒冷期）が終わりを迎え、縄文時代早期が幕を開けます。土器は多様化し、「^{よりいともんけい ど き}燃糸文系土器」や、「^{じょうこんもんけい ど き}条痕文系土器」など、様々な道具を用いて工夫を凝らした土器が出現します。

① 燃糸文系土器

「縄文」や「燃糸文」が全体につけられた早期前半の土器で、関東地方を中心に分布が見られます。底はとがるような砲弾型や丸底が基本の形となっています。土器の口縁（口の部分）は基本的に平坦ですが、外に広がるようなものや厚くするものが見られます。



燃糸文系土器



前原遺跡 包含層出土
燃糸文系土器

② ^{おしかたもん ど き}押型文土器

彫刻された木の棒を転がして描く「^{おしがたもん}押型文」が付けられるのが特徴の土器です。形は多くのものが尖った底をしています。押型文の種類は格子状や山形、円形など様々な形の文様を見ることができます。



縦方向の山形文（押型文土器）

③ ^{かいがら}貝殻・^{ちんせんもんけい ど き}沈線文系土器

早期中頃の土器です。「^{かいがらもん}貝殻文」や「^{ちんせんもん}沈線文」や^{しとつ}刺突（棒などを用いて刺す）、隆起線文などがつけられます。また、文様がフリーハンドで描かれるのも特徴です。底の形は燃糸文系土器と同様に、砲弾型や丸底型が基本ですが、口縁については波状のものもみられるようになります。

④ 条痕文系土器

縄文時代早期後半の土器です。貝殻を用いた条痕（すじ目の痕）が特徴であることから「条痕文系土器」と呼ばれます。貝殻以外にも、クシ状・棒状工具や縄文、粘土紐など様々な道具が利用されました。こうした道具を用いて、斜めや横方向の直線文様、三角形が連続するような「^{きょしじょうもん}鋸歯状文」といった幾何学文様が描かれました。また、^{たいど}胎土（土器をつくる粘土）には繊維が含まれており、この繊維によって大型の土器の製作を可能にしたと考えられています。



貝殻・沈線文系土器



条痕文系土器



山崎遺跡 第7号炉穴出土
条痕文系土器

縄文キーワード1

縄文 縄の回転による文様を指すのが一般的です。草創期の段階ですでに利用がはじまっていた。左巻き、右巻き、2本の縄を組み合わせたり、別の縄を巻き付けたり、など多種多様な撚り方の縄によって文様がつけられました。また、転がすだけでなく押し付けて文様をつける方法（押圧縄文）もあり、特に草創期の多縄文系土器に用いられました。また、縄文をつける縄のように文様をつける道具のことを原体げんたいといいます。

隆起線文 粘土帯による文様です。太さによって呼び方が変わり、より太いものを隆帯文りゅうたいもんと呼びます。宮代町の微隆起線は隆起線のなかで、もっとも細いものです。隆起線は一般に粘土紐を貼り付け横方向に巡らせられますが、微隆起線はヘラ状の工具によって線が引かれた際にできるはみ出た粘土を文様として用いました。

撚糸文 木の棒などに撚った糸を巻きつけた原体らくじょうたい（絡糸体）を転がしてできる文様です。この棒と紐を押し付けるようにしてつけられた文様は絡条体圧痕文らくじょうたいあつこんもんと呼ばれます。

沈線文 凹んだ線による文様です。竹や貝、木などを使ってつけられました。縄文土器といえば縄文ですが、沈線文のつけられた土器も多く存在し、時期によっては縄文ではなく、貝殻や竹などでつけられる沈線文が主体となります。

貝殻文 貝殻を用いた文様です。押し当て方や引き方の違いでさまざまな文様が描かれます。

押型文 木の棒などに彫刻をしたものを転がしてできる文様です。山形、格子目、楕円上の文様がよく描かれました。

条痕文 貝殻を使ってつけられた筋目（条痕）文様です。縦横斜めと様々な方向に線が引かれ多様なモチーフが描かれました。

鋸歯状文 沈線などで描かれる文様モチーフの一つです。三角形が連続するような文様です。

第2章 多様化する縄文土器

約 7,000 年前、縄文時代前期になると土器はバリエーションが豊かになり、派手なものが出現します。この時代の土器では「羽状縄文系土器」や、「諸磯式土器」などがあげられます。

① 羽状縄文系土器

縄文時代前期前半の土器で深鉢や浅鉢がみられます。この時期の土器まで胎土に繊維を含み、縄文によって「羽状（V字状）文様」やひし形状の文様を描くのが特徴です。また、注ぎ口のある片口付の土器が見られるようになります。竹管を用いた「コンパス文」や、「ループ文」とも呼ばれる環付の縄文などがつけられました。また、「蕨手状」のモチーフが描かれるものもみられます。この時期の土器まで胎土に繊維が含まれますが、終わりごろには混入がなくなります。この系統の土器は関東地方では古い順に「花積下層式土器」・「関山式土器」・「黒浜式土器」に分類されます。



羽状縄文系土器
(上 関山式土器 下 黒浜式土器)



道仏北遺跡 包含層出土
関山式土器



道仏北遺跡 第13号住居出土
黒浜式土器

② 諸磯式土器

竹管を利用して文様を描くことが多い土器です。形は浅鉢や深鉢、壺などが知られます。縄文を下地にして竹を半分にしたもの（半截竹管）や、へら状の工具などを用いて沈線や爪型文などの文様が描かれます。粘土紐を貼り付けた立体的な文様（浮線文）や沈線による「木葉文」など様々なモチーフが描かれるのも特徴です。土器の口縁は平らなものと4単位（頂点が4つ）の波状のものがあり、外反します。また、「獣面把手」とよばれる装飾がつけられる土器もあります。諸磯式土器の終わりごろには土器全体が小ぶりになります。a式、b式、c式と時期順に分類されます。



木の葉文

③ 浮島・興津式土器

前期後半の土器で深鉢が基本形です。縄文を使用せずに竹管文と貝殻文を多用することが特徴です。道具の角度や押し方、大きさを変えながら諸磯式土器と同様に様々な文様がつけられています。



竹管文と浮線文（諸磯式土器）



道仏北遺跡出土 第10号住居出土



前原遺跡 包含層出土



獣面把手（諸磯式土器）



貝殻による文様（浮島式土器）



前原遺跡 包含層出土 浮島式土器

④ ^{じゅうさんぼだいしきどき} 十三菩提式土器

縄文時代前期末の土器です。「^{うずまきもん}渦巻文」や貝殻文、幾何学的な文様などが描かれます。これらは前期に見られる土器のなかでも、関東地方と中部高地（山梨県や長野県）の土器の特徴です。



渦巻文と鋸歯状文、印刻文（十三菩提式土器式）



道仏北遺跡 包含層出土 十三菩提式土器

縄文キーワード2

羽状縄文 右撚りと左撚りの縄を転がした際の進行方向の違いを利用し、左右対称の羽根状（V字）に文様をつけます。左右それぞれの原体を1つにした原体でつける結束のある^{うじょうじようもん}羽状縄文を用いる方法と、一つにせず個々に左右の原体を転がす方法があります。

蕨手状文 沈線などによって描かれる、蕨手と呼ばれる^{わらび}蕨の若い芽のように先の丸まった形に似た文様です。また、縄を転がしてつける縄文文様の中には蕨手縄文という文様があり、ループ文とも呼ばれます。縄文原体の先に環をつくり、それを転がすことでつけられます。

竹管文 竹を代表とした、中が空洞の筒状である植物を利用した文様です。筒状のままだけでなく、半分に割った半截竹管などとしても利用しました。また、先端をV字状や三角状に加工することもありました。こうした道具を角度や方向を変えながら、押す・引くことで様々な文様を描きました。縄文時代早期末から中期の前半まで用いられ、特に前期の諸磯式土器で多用されました。竹管文では平行沈線文、爪型文、結節状浮線文などが代表されます。

コンパス文 竹管文の一種です。半円形の形状を利用し、回転させてできる文様です。

浮線文 隆起線文などと同様に細い粘土紐を貼り付ける文様です。線上に刻みや縄文などを付けます。押し引きによってつけられる文様は^{けっせつふせんもん}結節浮線文と呼ばれ、刻みなどがつけられるものは諸磯b式と呼ばれる諸磯式土器の古い段階に、結節浮線文は諸磯c式土器や十三菩提式土器など新しい段階の土器に見ることができます。

獣面把手 土器の口縁部につけられる、動物を模した装飾です。展示される獣面把手はこのタイプの装飾が最初に表現されたと考えられている前期後半の諸磯b式土器のものになります。この時期の装飾は基本的にイノシシがモチーフとされており、たてがみや、豚鼻などが表現されています。イノシシがモチーフとしてよく用いられた理由は、多産のシンボルであったからとも言われています。この装飾自体にも変遷がみられ、平面的な装飾から始まり、立体的になり、再度平面化した後に、円形の文様を貼り付けるだけと簡略化され、イノシシの形は消えてしまいます。宮代町では獣面把手3点出土しており、たてがみや目鼻がしっかりとつくられた、写実的段階のものになります。なお、1点はイノシシでなく、トリのようにも見え、仮にトリをモチーフとしたものであるならば、珍しい土器です。

渦巻文 渦巻き状の文様です。縄文時代における登場は前期にみられ、羽状縄文系土器のころには成立していました。その後は晩期まで断続的に用いられる文様です。沈線や隆帯文によって描かれていますが、後期や晩期になると彩色によって描かれる土器も出現します。

第3章 縄文時代の最盛期

約 5,500 年前、縄文時代中期を迎え縄文時代は最盛期を迎えます。埼玉県内では遺跡が最も確認される時代であり、宮代町内でも同様に多くの遺跡が確認されています。

この時代の土器は派手であることが大きな特徴です。立体的な装飾や文様を施し、文様自体も幾何学的なものや、動物や人を模したものなど多くのバリエーションを見ることができます。縄文土器というときに思い浮かぶ、いわゆる^{かえん ど き}火焰土器なども中期の土器にあたります。また、土器自体に厚みがあるのも特徴で、力強い印象と表現されます。一方で、中期の終わりになると大きな特徴であった派手さや雄大さが消失していきます。

① ^{ごりょうがだいしき ど き}五領ヶ台式土器

関東地方や中部地方に見られる土器です。深鉢や浅鉢が主で、「細線文」や「^{さいせんもん いんこくもん}印刻文」、半截竹管などの工具を用いた^{しゅうごうちん}集合沈線文などが主要な文様とされています。胎土に雲母などを混ぜるのも特徴です。



竹管文や印刻文
(五領ヶ台式土器)



道仏北遺跡 第35号土坑出土

② ^{あたまだいしき ど き}阿玉台式土器

胎土に雲母を多く含むのが特徴です。隆帯や沈線によって文様が構成され、口縁部、^{けいぶ}頸部、体部と3つの部位に大きく分けられます。口縁部は区画をつくる文様、頸部は文様をつけないか、簡素な文様、体部は「^{けんすいもん}懸垂文」などがそれぞれ部位ごとの代表的な文様となります。また、阿玉台式土器期の前半では土器に縄文をつけないことも特徴です。深鉢形が基本で、ほかに浅鉢の土器などがみられます。



上5点 阿玉台式土器式
下4点 勝坂式土器

③ ^{かつさかしき ど き}勝坂式土器

厚みが1cm前後と厚く、胎土には雲母や砂粒を含みます。土器口縁部に突起がつき非常に派手な土器で深鉢形が主流です。竹管や太めの隆帯などを用いて、人やへびなどの動物をモチーフとした文様や把手がつけられるのも大きな特徴です。

左 道仏北遺跡 包含層出土
右 金原遺跡 第403号土坑出土



④ 加曽利 E 式土器

中期後半に関東地方で栄えた土器です。形は主に深鉢で、口縁部には隆帯を用いた文様がつけられ、渦巻文や区画文が描かれます。胴部には縄文や擦糸文がつけられたあとに、沈線や磨消縄文^{すりけしじょうもん}によって懸垂文などが描かれます。勝坂式土器と比較すると簡素化の傾向があり、後半になるとよりその傾向が強まります。終末期には口縁部と胴部の区画が消失してしまいます。加曽利 E 式土器は古い順に I から IV の 4 段階に大きく分類され、III の後半から IV にかけて区画の消失や J 字、X 字状といった文様が描かれます。この時期、中部地方では曽利式土器^{そりしきどき}と呼ばれる土器が普及していました。曽利式系の土器や影響を受けた加曽利 E 式土器は宮代でも発掘されており、縄文時代から他地域との交流があったことが確認できます。



隆帯文や懸垂文（加曽利 E 式土器）



地藏院遺跡出土
第 2 号埋設土器
(加曽利 E 式土器)



地藏院遺跡 包含層出土 曽利式系土

縄文キーワード 3

細 線 文 細い沈線による文様です。

印 刻 文 文様を構成する一部分をくぼませ表現する手法です。三角印刻文の場合、沈線などで三角状のモチーフを描いたのち、三角の部分をえぐり取るなどしてくぼませます。手法としては一部の晩期土器の特徴とされていますが、こうして文様をくぼませモチーフを描くやり方は前期土器からすでに見ることができます。

懸 垂 文 垂れ下がる文様で、中期に多く用いられました。隆帯や沈線、磨消縄文によって描かれます。懸垂文も直線、曲線、蛇行^{だこう}とその形はさまざまで、土器によっては生き物を表すような文様も見られます。

磨消縄文 中期末以降にみられ、土器に縄文を付けた後、沈線などで文様や区画を描き、その内側や外側の縄文を磨り消します。

第4章 変化する縄文

約 4,400 年前の縄文時代後期になると勝坂式期にみられたような派手で厚みのある土器はあまり見られなくなり、薄手で精巧な土器が多くなります。また、形も多様化します。深鉢土器においてはきちんとした文様や成型がされる精製土器とそうでない粗製土器の差が明確になります。宮代町の大きな特徴として、この時期の遺跡数が最も多という点が挙げられます。

① 称名寺式土器

後期初頭の土器で西日本の土器の影響を受けた土器と考えられています。かめ、深鉢、注口土器などが形としてみられ、J 字モチーフの文様が特徴として挙げられます。他に、渦巻きや釣り針、剣先状といったモチーフが描かれます。また、2 本の沈線とその中を充填する縄文で構成される帯状の文様が基本的な文様です。文様は時代が進むにつれて簡略化される傾向にあり、沈線と縄文から沈線と列点（点による文様）、沈線のみというように変化します。



沈線と縄文、列点による文様(称名寺式土器)



前原遺跡 第8号住居出土



山崎山遺跡 第7号住居出土

② 堀之内式土器

後期の中頃の土器で、深鉢や甕、浅鉢、注口土器などがみられます。文様は集合沈線による懸垂文、曲線によって構成され、後半になると磨消縄文などを持ちいて横方向に文様が構成されるようになります。後半の土器では小型化の傾向が見られます。1 式と 2 式に分類され、2 式の土器は三角形のモチーフが特徴になります。



沈線による様々な文様
(堀之内式土器)



地藏院遺跡 第6号土坑出土



藤曾根遺跡 包含層出土



山崎遺跡 第13号土坑出土

③ 加曾利^{かそりびしきどき}B式土器

縄文時代後期中頃の薄手の土器です。文様は主に横方向の区画と充填する（区画したあとに縄文をつける）文様や磨消縄文が見られます。後半になると、縄文の代わりに羽状（V字）の文様や斜め方向に沈線がつけられた土器が出現します。また、表面に磨きが見られるのも特徴です。キチンと文様の描かれる精製土器と縄文のみがつけられる粗製土器の差がこの時期、際立つようになります。型式はさらに1式、2式、3式に分類されます。



沈線による区画と縄文、沈線文(加曾利B式土器)



山崎南遺跡 包含層出土



山崎山遺跡 第5号住居出土

④ 後期^{あんぎょうしきどき}安行式土器

関東地方の後期後半の土器です。後期安行式土器は安行1式土器と安行2式土器に分類されます。残念ながら、宮代町では安行2式土器の土器片が1点見つかったのみです。沈線などの区画と縄文で構成される帯縄文や、瘤^{こぶ}が装飾されるのが特徴です。特に瘤は安行2式以降、鼻状の独特の形状になります。東北地方の影響を受けたと考えられる「三叉文^{さんさもん}」が描かれるのも特徴です。

縄文キーワード4

注口土器 注ぎ口がついた土器で、現在の土瓶や急須に似ていま

す。文様などが丁寧に描かれるほか、赤色顔料などで彩色された土器が多いのも特徴です。用途として、水や酒などを注いでいた、祭祀で用いた、など諸説あり、まだ

わかりません。注ぎ口のついた土器に関して、最古

のものは草創期に発見されており、前期や中期にも見ら

れますが、いわゆる注口土器と呼ばれる土器は後期に入ってから成立したとされています。

三叉文 沈線などで描かれるモチーフで、三角形に似た文様です。印刻文のように文様をくぼませて表現する土器も見られます。関東地方や中部地方の中期の前半によく見られ、その後も、関東や東北地方の後・晩期に用いられます。円形の文様と組み合わせる玉抱三叉文^{たまだきさんさもん}や複数の三叉文が合わさる入組三叉文^{いりくみさんさもん}などバリエーションが見られます。



山崎遺跡 第2号住居出土 堀之内式土器

第5章 縄文の一万年

長く続いた縄文時代も終わりの時を迎えます。稲作の流入によって大きく文化が変化し、縄文時代から弥生時代へと移り変わっていきます。宮代町では縄文時代晩期の土器はわずかししか出土しておらず、残念ながら弥生時代の痕跡も現在まで発見されていません。宮代に残る人の痕跡は古墳時代になるまで忽然と消え失せてしまいます。

宮代町で発掘された晩期の土器は晩期安行式土器^{ばんきあんぎょうしき ど き}と呼ばれるものです。後期安行式土器でもみられた豚鼻がつけられるほか、三叉文や曲線状の文様が特徴として挙げられます。また、波状の口縁と平らな口縁の土器によって文様に差があり、三角の区画といった文様が波状の口縁の土器にのみ見られますが、後半になると両者の差が減少します。後半になると縄文が見られなくなり、沈線と列点によって文様が描かれるように変化します。時期順に安行 3a 式土器、安行 3b 式土器、安行 3c 式土器、安行 3d 式土器と分類されます。

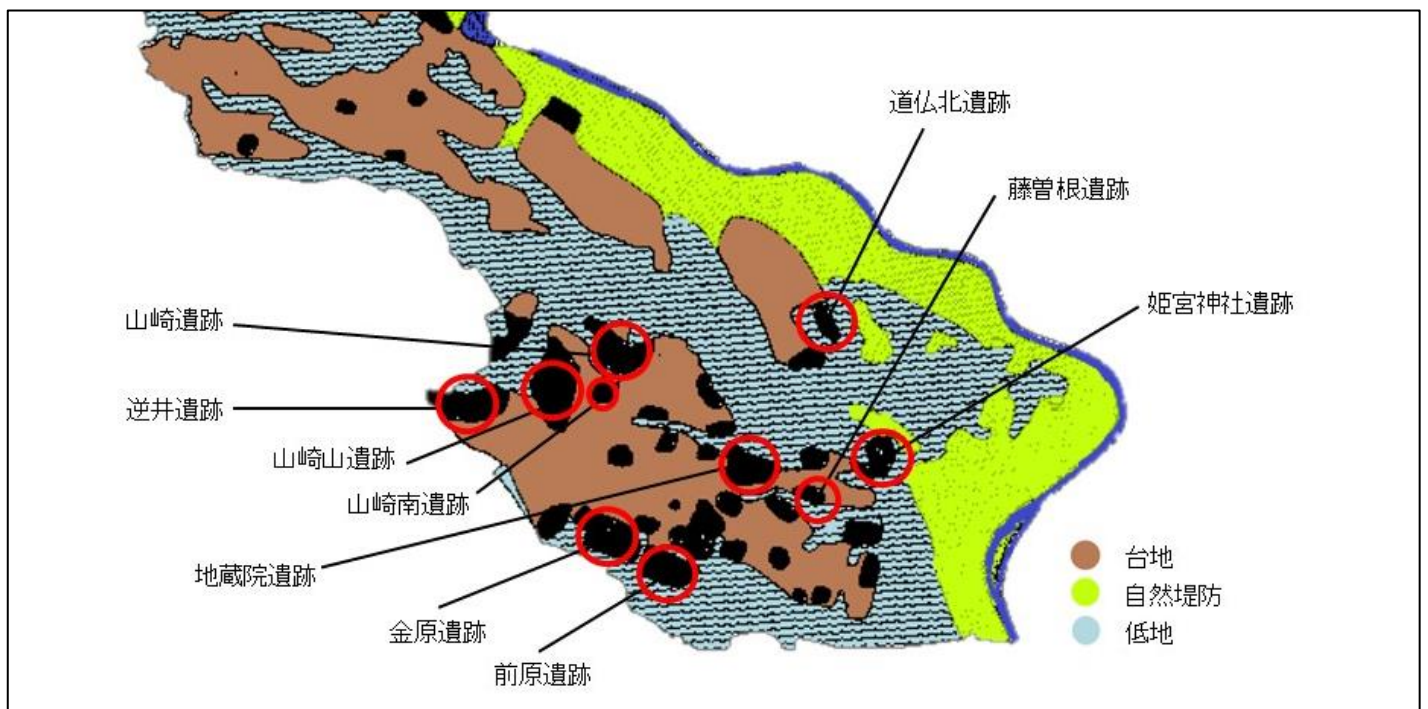


姫宮神社遺跡出土 安行 3c 式土器



道仏北遺跡出土 安行 3d 式土器

展示している土器が出土した遺跡

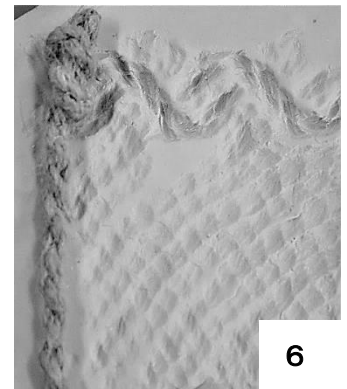
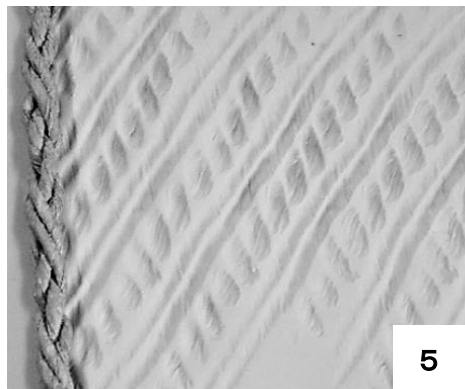
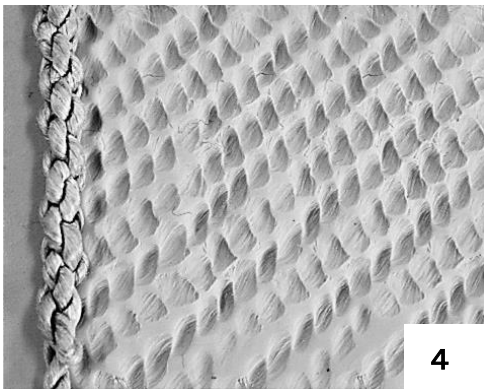
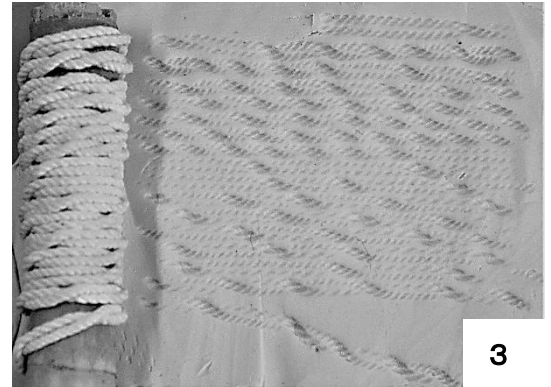
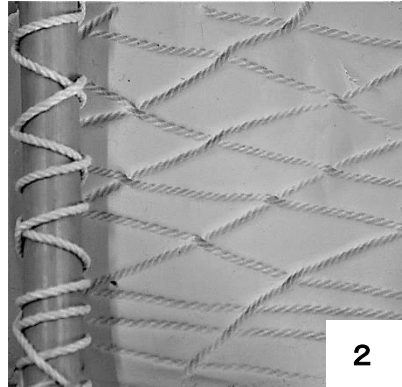
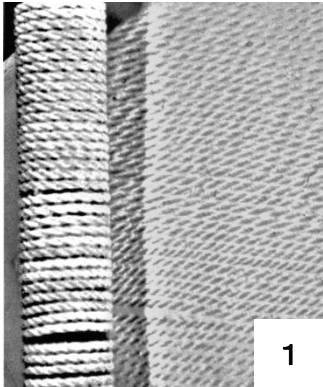


『宮代町史資料 第7集 宮代の遺跡—遺跡の分布—』より縄文時代の遺跡分布を加筆

縄文の文様

解説だけでは分からない……そんな悩みを解決する文様一覧表です。本企画展で触れた原体や文様の紹介です。今回ご紹介できなかった文様や特徴は多く、土器型式もより複雑です。縄文文化のほんの一端としてご覧ください。

① 縄文・撚糸文



1～3 撚糸文

4 単接縄文

5 異条斜縄文

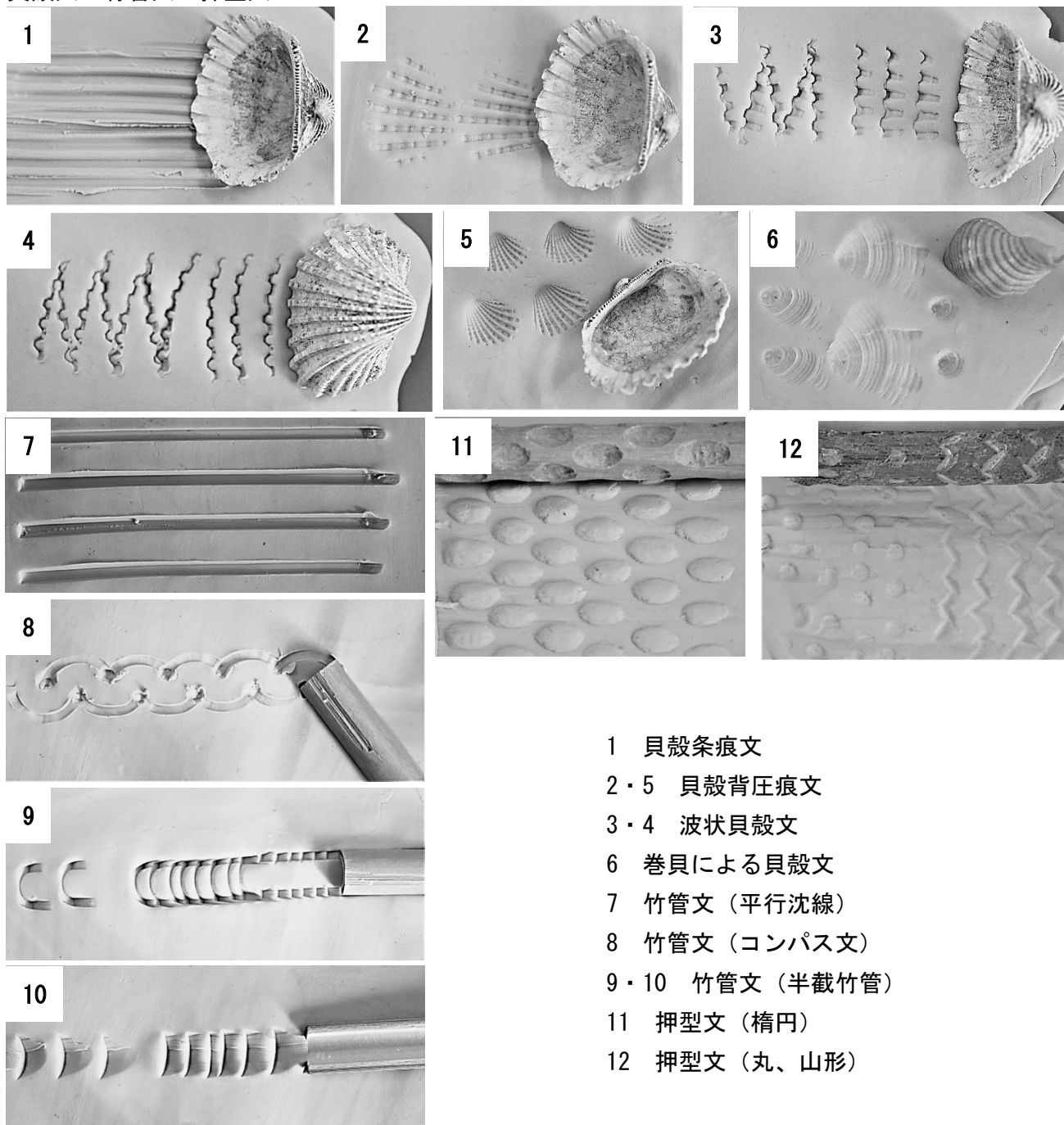
6 結節縄文（先端）

7 結束のある羽状縄文

8 結節縄文（途中）

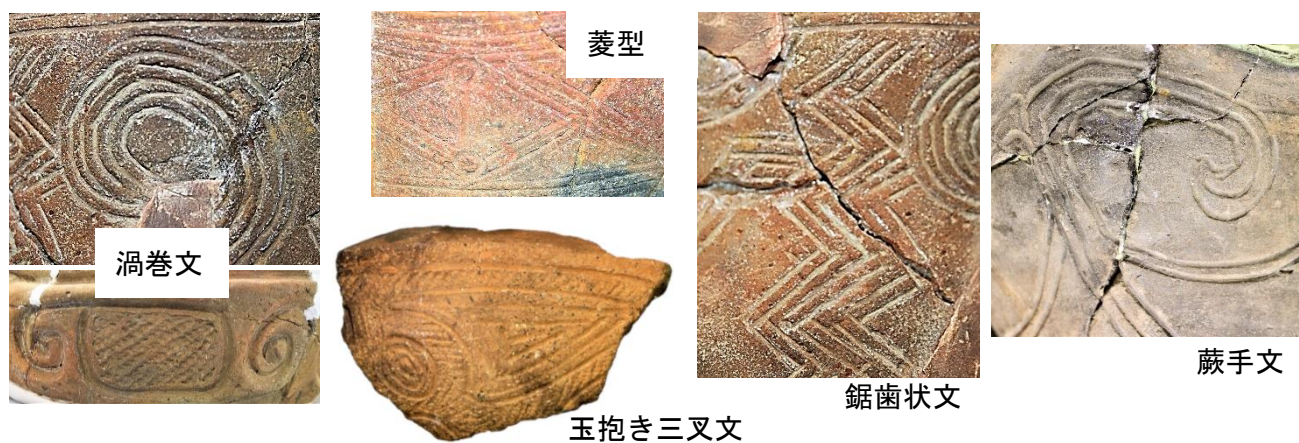
9 環付縄文（ループ文）

貝殻文・竹管文・押型文



- 1 貝殻条痕文
- 2・5 貝殻背圧痕文
- 3・4 波状貝殻文
- 6 巻貝による貝殻文
- 7 竹管文（平行沈線）
- 8 竹管文（コンパス文）
- 9・10 竹管文（半截竹管）
- 11 押型文（楕円）
- 12 押型文（丸、山形）

② モチーフ



出展目録

草創期・早期の土器

No	報告書	遺跡名	遺構	図版番号	土器型式
1	1集	前原遺跡	包含層	89図1～7	微隆起線文土器
2	1集	前原遺跡	包含層	102図1	撚糸文系土器
3	18集	山崎遺跡	第7号炉穴	73図2	条痕文土器
4	18集	山崎遺跡	第7号炉穴	73図3	条痕文土器
5	18集	山崎遺跡	第7号炉穴	73図1	条痕文土器

前期の土器

6	22集	道仏北遺跡	包含層	99図3	花積下層式土器
7	22集	道仏北遺跡	包含層	99図1	関山式土器
8	22集	道仏北遺跡	第13号住居	65図1	関山式土器
9	22集	道仏北遺跡	第1号住居	14図2	黒浜式土器
10	22集	道仏北遺跡	第1号住居	14図4	黒浜式土器
11	22集	道仏北遺跡	第1号住居	15図4	黒浜式土器
12	22集	道仏北遺跡	第13号住居	65図2	黒浜式土器
13	1集	前原遺跡	包含層	127図4	諸磯式土器
14	22集	道仏北遺跡	第2・18号住居	24図4	諸磯式土器
15	20集	道仏北遺跡	第10号住居	44図1	諸磯式土器
16	22集	道仏北遺跡	包含層	100図1	諸磯式土器
17～19	22集	道仏北遺跡	包含層	123図1～3	諸磯式土器（獣面把手）
20	1集	前原遺跡	包含層	129図1	浮島式土器
21	22集	道仏北遺跡	第9号住居	49図4	浮島式土器
22	22集	道仏北遺跡	第2・18号住居	24図8	浮島式土器
23	22集	道仏北遺跡	包含層	100図4	浮島・興津式土器
24	22集	道仏北遺跡	包含層	102図1	十三菩提式土器
25	22集	道仏北遺跡	包含層	103図5	十三菩提式土器

中期の土器

26	22集	道仏北遺跡	第35号土坑	80図2	五領ヶ台式土器
27	22集	道仏北遺跡	第35号土坑	80図5	五領ヶ台式土器
28	16集	金原遺跡	第403号土坑	176図1	勝坂式土器
29	22集	道仏北遺跡	包含層	102図4	勝坂式土器
30	22集	道仏北遺跡	包含層	102図6	勝坂式土器
31	22集	道仏北遺跡	包含層	103図7	勝坂式土器
32	16集	金原遺跡	第24号住居	92図3	加曽利E式土器
33	16集	金原遺跡	第26号住居	115図1	加曽利E式土器
34	17集	地藏院遺跡	第3号土坑	36図3	加曽利E式土器
35	24集	地藏院遺跡	第2号埋設土器	103図3	加曽利E式土器
36	24集	地藏院遺跡	包含層	163図3	加曽利E式土器
37	24集	地藏院遺跡	包含層	163図5	加曽利E式土器

38	25集	地藏院遺跡	第1号住居	32図1	加曽利E式土器
39	16集	金原遺跡	第24号住居	101図2	加曽利E式土器
40	24集	地藏院遺跡	包含層	163図6	曾利式系土器
41	24集	地藏院遺跡	包含層	164図1	曾利式系土器

後期の土器

42	1集	前原遺跡	第8号住居	76図1	称名寺式土器
43	1集	前原遺跡	第8号住居	76図2	称名寺式土器
44	1集	前原遺跡	第8号住居	76図3	称名寺式土器
45	15集	山崎山遺跡	第7号住居	136図4	称名寺式土器
46	15集	山崎山遺跡	第7号住居	137図1	称名寺式土器
47	16集	金原遺跡	第13号住居	56図3	称名寺式土器
48	16集	金原遺跡	第226号土坑	146図1	称名寺式土器
49	16集	金原遺跡	第22号住居	100図1	称名寺式土器
50	16集	金原遺跡	第226号土坑	156図1	称名寺式土器
51	16集	金原遺跡	第2号埋設土器	199図1	称名寺式土器
52	16集	金原遺跡	第372号土坑	147図4	称名寺式土器
53	24集	地藏院遺跡	第6号土坑	33図3	堀之内式土器
54	24集	地藏院遺跡	第6号土坑	33図2	堀之内式土器
55	16集	金原遺跡	第20号土坑	92図1	堀之内式土器
56	6集	逆井遺跡	第1号住居	32図1	堀之内式土器
57	6集	逆井遺跡	第30号土坑	32図2	堀之内式土器
58	8集	藤首根遺跡	包含層	35図2	堀之内式土器
59	15集	山崎山遺跡	第5号住居	104図4	堀之内式土器
60	15集	山崎山遺跡	第4号住居	136図1	堀之内式土器
61	18集	山崎遺跡	第1号土坑	53図1	堀之内式土器
62	18集	山崎遺跡	第2号住居	41図1	堀之内式土器
63	18集	山崎遺跡	第13号土坑	59図1	堀之内式土器
64	18集	山崎遺跡	第13号土坑	59図4	堀之内式土器
65	18集	山崎遺跡	第14号土坑	53図4	堀之内式土器
66	18集	山崎遺跡	第12・16号土坑	54図1	堀之内式土器
67	18集	山崎遺跡	第12・16号土坑	57図1	堀之内式土器
68	18集	山崎遺跡	第3号住居	44図1	堀之内式土器
69	1集	前原遺跡	第7号住居	73図1	加曽利B式土器
70	10集	山崎南遺跡	包含層	27図4	加曽利B式土器
71	15集	山崎山遺跡	第5号住居	105図1	加曽利B式土器

晩期の土器

72	25集	姫宮神社	第4号墳	75図15、16	安行Ⅲc式土器
73	22集	道仏北遺跡	包含層	151図22～28	安行Ⅲd式土器

*復元土器及び主要な破片のみ記載

参考文献

宮代町教育委員会 1995『宮代町史資料 第7集 宮代の遺跡 遺跡の分布』

戸沢允則 編 1996『縄文時代研究事典』東京堂出版

宮代町教育委員会 2002『宮代町史 通史編』

小林達雄 編 2008『総覧縄文土器』アムプロモーション

赤塩 仁 2008「十三菩提式土器」

秋田かな子 2008「加曽利B式土器」

新屋雅明 2008「晩期安行式土器」

今福利恵 2008「勝坂式土器」

金子直行 2008「条痕文系土器」

加納 実 2008「堀之内式土器」

可児通宏 2008「縄文の施文原体と文様」

2008「押型文土器の施文原体と文様」

小林謙一 2008「縄文時代の年代（東日本）」

佐藤雅一 2008「隆起線文系土器」

菅谷通保 2008「曾谷式・後期安行式土器」

関根慎二 2008「諸磯式土器」

田中和之 2008「羽状縄文系土器」

大工原豊 2008「獣面把手」

塚本師也 2008「阿玉台式土器」

土屋健作 2008「縄文原体の製作」

寺内隆夫 2008「竹管文」

中島庄一 2008「称名寺式土器」

原田昌幸 2008「撚糸文系土器

細田 勝 2008「加曽利E式土器」

松田光太郎 2008「浮島式・興津式土器」

2008「貝殻文」

山本典幸 2008「五領ヶ台式土器」

山村貴輝 2008「玉抱き三叉文」

領塚正浩 2008「貝殻・沈線文系土器」

工藤雄一郎 2012「日本列島における土器出現期の較正年代についてIntCal04とIntCal09の違いおよび「13,000問題」」『国立歴史民俗博物館 第172集』

谷口康浩 2019『入門縄文時代の考古学』同成社

さいたま市 2023『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅰ』

宮代町文化財調査報告書（宮代町教育委員会）

文化財調査報告書第1集 1983 『前原遺跡』

文化財調査報告書第6集 1998 『逆井遺跡・山崎山遺跡』

文化財調査報告書第8集 2001 『藤曽根遺跡・中寺遺跡』

文化財調査報告書第10集 2002 『山崎南遺跡・道仏遺跡』

文化財調査報告書第15集 2010 『山崎遺跡・山崎山遺跡』

文化財調査報告書第16集 2011 『金原遺跡』

文化財調査報告書第17集 2011 『身代神社遺跡・地藏院遺跡・宿源太山遺跡・山崎山遺跡』

文化財調査報告書第18集 2012 『山崎遺跡』

文化財調査報告書第20集 2013 『道仏北遺跡・道仏上遺跡』

文化財調査報告書第22集	2014	『道仏北遺跡』	
文化財調査報告書第24集	2021	『地藏院遺跡』	
文化財調査報告書第25集	2023	『中寺遺跡・道仏北遺跡・地藏院遺跡・山崎遺跡・姫宮神社遺跡集	道仏北遺跡』